

ディベートからパネル・ディベートへ

4つの立場によるディベート

前任校で国語の授業にディベートを取り入れました。その結果、国語の授業が変わり教室が活性化しました。何よりも生徒が変わりました。ディベートの実践を重ねる中で、ディベートのテーマである論題を生徒と考えているときに、立場が2つではなく4つになってしまったことがありました。

それは、『故郷』の学習でした。ぜひ考えてみたい論題であったため、ディベートとは言えないのかもしれませんが、4つの立場のままディベートを行いました。そのときは、パネル・ディスカッションとディベートを掛け合わせたようで、これもわるくはないと思いました。ただ、盛り上がりや白熱するかという点ではディベートには劣ると感じました。同時に、立場は2つというディベートの限界にも思いが至りました。

ディベートを超えるパネル・ディベートを提案する

あるとき、『ディベートを超えるパネル・ディベートを提案する』という本に出会いました。食いつくように、本を手にし、読んでみました。すぐに「あれだ」と思いました。そうです。私がたまたま行った4つの立場からのディベートそのものでした。

すぐに国語の授業に取り入れようと考えました。ちょうど、一斉授業からの脱却を目指し、ジグソー学習を行ったところでした。生徒は、授業が変わることを渴望していました。うまい具合に、パネル・ディベートを行うための下地ができていました。

パネル・ディベートから意見文へ

生徒に話す力・話し合う力をつけさせると同時に、書く力をつけさせたいと常々考えていました。文章を書く力を向上させるには、いかにして書かせるかだけではなく、いかにして話させ、聞かせ、読ませるかの指導も必要です。そこで、話す・聞く活動と書く活動を関連させ、双方の高まりをねらった実践を行うことにしました。

パネル・ディベートの導入

論理的な文章を書く力、情報を文章に生かす力を高めるためにはパネル・ディベートが有効です。パネル・ディベートとは、以下のように、パネルディスカッションの長所を生かしたディベートのことです。

複数の立場の派を設定し、その派ごとにロールプレイ・シミュレーション的にパネリストとなって、全体が討論に参加する。

パネリストたちがロールプレイング的に役になりきって討論を行うため、実におもしろく、かつスムーズに多様な立場が存在することに気づけるよさがあります。

また、ディベートとは違い、より多くの生徒が役割の中に入り込めるため、従来よりも参加しているという雰囲気があり、学習の耐性的な場もしっかりとつくられます。論拠を明確にした討論が、書く意欲をかきたて、書く素材を提供し、論理を組み立てる方法を学ばせます。

そうして、書こうとする時がきたときには、書くべき内容がおおむねできあがっています。討論にはそうした学習効果があります。

さらには、以下のように、立論のための論理の組み立て方、その論理を支える根拠となる情報の整理・活用、つまり情報活用能力を育てることが可能です。

- ① テーマに関する多くの情報を獲得できる。
- ② 情報を選択し、整理する能力が身につく。
- ③ 相手を意識し、説得する力が身につく。
- ④ 自分以外の人の多様な考えを知ることができる。
- ⑤ 自分の考えを整理し、深化できる。